

国立国語研究所学術情報リポジトリ

形容詞感動文における曖昧性回避の条件

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese (BCCWJ), Corpus of Spontaneous Japanese (CSJ), Nagoya University Conversation Corpus 作成者: 西内, 沙恵 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001690

形容詞感動文における曖昧性回避の条件

西内 沙恵 (国立国語研究所 研究系 理論・対照研究領域) †

The Condition of Disambiguation in Adjective Exclamatory Sentence

Sae Nishiuchi (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

要旨

感動文では、言語的な分脈情報のほか、眼前の情景も意味の推測に大きく寄与するとされる。しかし、「(子供の表情を回想して) この顔のおかしかったこと。」のように、過去の事態も表現しえることから、対象が目の前に実在することは必須要素ではない。本研究は、「青っ！ <*色が青い / **未熟だ>」や「くさい！ <*嫌なにおいがする / **怪しい>」のような多義的形容詞による感動文の分析から、先行研究で規定される形式的な文法枠組みに語用論的記述を加えようとするものである。多義語は、共起語や文脈情報などの言語要素が意味選択の大きな手がかりとなるとされる。言語的手がかりがない状態では、多義のいずれの意味も選択される可能性があるのにもかかわらず、眼前性の担保されない状態で出現し、意味の解釈が可能になるのはどのような条件によるのか。実例の観察から出現状況を分析し、意味の選択に語彙の特性と身体性がかかわっていることを論じる。

1. この研究の目的

感動文では、文脈などの言語的手がかりのみならず、眼前の情景なども非言語的な手がかりとして、意味の推測に寄与する(1)。しかし、笹井(2006)の文法枠組みによれば、感動文は過去の事態も表現しえ、対象が目の前に実在する必要が必ずしもない(2)。眼前の光景でなくとも、話し手の頭の中で対象が思い描かれる場合にも感動文は出現し、成立する。また、感動文は、格関係のある共起語を伴わないことがあり、このことから、言語的手がかりがない場合にも、聞き手と情景などの非言語情報の共有がない場合にも、言語表現として成立し、意味特定が可能となる。では、これらの手がかりがない場合に、いかにして意味の特定が担保されるのか。また、その曖昧性が回避される条件とは、どのようなものか。次節以降で感動文の文法枠組みを確認し、実例の出現状況の観察から意味表出の条件を見出す。

- (1) (空を見て) 青っ！* <*色が青い / **未熟だ> (筆者の作例)
 (2) (子供の表情を回想して) この顔のおかしかったこと。 (森本梢子『ママ』)

2. 文法枠組み

笹井(2006)は、山田文法に類別される疑問文のジャンルの中で情意を表す形式として扱われてきた「なんと～だろう！」¹と、喚体句との対応を論じ、感動文の文法形式を整理している。笹井(2006)にまとめられる感動文の文法枠組みを、形容詞に限定して表1に示す。なお、本研究は、笹井(2006)の感動文の文法枠組みを基軸に参考するものであるが、

† snishiuchi@ninjal.ac.jp

¹ 「なんと」が不定語として機能していないこと、属性概念を持つ語のみならず体言も要求すること、さらに叙述文と比較すると「なんと～だろう」の形式で判断辞の機能が無効化することを根拠に、疑問文としての扱いを見直している。

一部再考が必要と思われる次に述べる二点を表1に反映している。

まず、「なんて」・「なんという」・「なんていう」を、属性概念と体言を要求する点で「なんと」のバリエーションとして扱っている点である。「なんという」・「なんていう」が表1の縦軸2「こと/の」句的体言や、4「語幹」の用法を持たないこと、また「なんて」だけが(3)のように5「連体形」用法を有するとして、その出現のし方が統一的でないことが論じられている。笹井(2006)の文法枠組みでは、B型の表現形式として「なんと」が代表に扱われているが、バリエーションの中では「なんて」が最も広い用法を有する。このことから、本研究では、「なんて」を代表に表1を作成した。次に、A型の5「連体形」が終止形と同形のため、考察の対象から外している点である。この問題について、B型の5「連体形」を形容動詞の出現形があることを根拠に、形容詞も連体形の使用が可能ならばとも述べており、論旨が一貫していない。「B型に形容動詞が終止形で現れることはないため、形容動詞で現れない活用形式が形容詞では現れるとは考えられない」(笹井2006:24)という指摘は、形容詞と形容動詞で出現形式に差異がある限り全ての用法が対応していると断定する根拠が弱いことから、論点先取であろう。この点を考慮し、表1のB-5「なんて[形容詞-連体形]！」形式の出現の可否は、笹井(2006)のものを改変している。文法枠組みにおける活用形の扱いは、本稿では指摘するにとどめ、連体形と考えるべきか終止形と考えるべきか、あるいは品詞別に住み分けがなされていると考えるべきかは、別の機会に議論したい。なお、形容詞連体形が感動文として出現するかどうかという議論は、活用の理論的問題であり、次節で詳述する対象の観察では、終止形も連体形も同形式として統一的に扱っている。

(3)a. なんてかわいいの！ b. *なんとかわいいの！ cf. なんと可憐な！ (筆者の作例)

表1 形容詞感動文の文法枠組み(笹井2006を参考に)

	A型		B型 文頭「なんて」	
1 逆述語	[形容詞]+[名詞]！	○	なんて[形容詞]+[名詞]！	○
2 「こと/の」句的体言	[形容詞]こと！	○	なんて[形容詞]こと！	○
3 「さ」句的体言	[名詞]の[形容詞-語幹]さ！	○	なんて[形容詞-語幹]さ！	○
4 語幹	[形容詞-語幹]！	○	なんて[形容詞-語幹]！	×
5 連体形	[形容詞-連体形]！	※	なんて[形容詞-連体形]！	※

※笹井(2006)は、形容詞の連体形と終止形が同形のため、考察の対象外としている。

以上、文法的な扱いを見てきた。ここで、感動文の定義を確認しておく。感動文は、ただ話し手の感動が表出される表現形式というだけでなく、「文に示されている情報についての伝達を目的とはしない、話し手の感動を表出する文」(笹井2006:16-17)であると考えられている。笹井(2006)は、感動文の構造の解明に焦点を当てている。本研究では、この基礎的な文法枠組みに、意味の表れ方という語用論的記述を加えることを試みたい。

3. 調査

3.1 調査の目的と方法

感動文の語用を探るために、現代語の感動文の文法枠組み(表1)に準じ、実例を調査する。使用実態の調査には、コーパスアプリケーション『中納言』を用いて、『日本語話し言

葉コーパス』(以下, CSJ)・『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(以下, BCCWJ)・『名大会話コーパス』(以下, 名大) から抽出された実例を観察する。

このとき, 感動文の意味表出を分析する観点として, 多義の表出の問題に着眼する。この観点から, 調査対象の形式が次のように限定される。意味を把握するためには, 用法の側面を無視することができないことが国広(1982)で述べられている。多義語が用いられるとき, その語が持つ複数の意味のうちどの意味で用いられているのか, という意味の特定には, 格関係のある共起語などが大きな手がかりになる。感動文は, 文法的に体言骨子とされ, 体言が明示される場合には, 被修飾名詞によって形容詞の任意の意味が特定されることが想定される。しかし, 表1の4「語幹」と5「連体形」の用法では, 形式的に被修飾名詞が明示されない。これらの用法の調査が感動文の意味特定の問題を追求するのに理想的であると考へ, 本調査では, 4「語幹」と5「連体形」を調査対象とする。

さらに, 多義語に着眼することで, 次のことが期待される。多義の立ち現れ方を分析することは, 感動文の運用において言語情報と非言語情報, それぞれの果たす役割, また語そのものに担われる役割を一部解明することにつながる。体言骨子として文法的に被修飾名詞を抱えていても, 実際の言語運用では, 感動文に被修飾名詞が伴わないこともある。では, そのような運用についてその場ごとに解釈されるものと考え ad hoc 概念構築 (Carston 2002) が効いているのだろうか。感動文が「伝達を目的としない」と定義されることから, 他者に向けて発せられているものではないことになり, ad hoc 概念構築による解釈は適切ではないということになる。本研究では, 解釈過程を追う手順によらず, 感動文で曖昧性が回避される条件を整理することを試みる。この整理の必要性は, (4)のように, ある多義語の意味がその場限りの文脈がなくとも曖昧にならないことにも確認される。(4)の使用で立ち現れる意味は, <嫌なにおいがする>であり, <怪しい>という意味を想定しにくいものと思われる。刑事が一人で思案, 独り言つ場面を想定すれば, <怪しい>が選択されるかもしれないが, 限定的である。このように, 被修飾名詞や文脈がない場合でも任意の意味が想定され, 意味の混同は起きない。被修飾名詞などの周辺の要素に意味の選択を担わせる多義的形容詞であっても, 言語的・非言語的な手がかりなしにある程度意味が特定されるのはなぜだろうか。

(4) くさい! * <*嫌なにおいがする / **怪しい> (筆者の作例)

3.2 調査結果

調査の結果, B型の4「語幹」用法及び5「連体形」用法は抽出されなかった²。しかし, B型の感動文は, 書き言葉で多く観察される(笹井2006)という特性から, 後続する文脈で説明的にパラフレーズされていたり, 文脈に意味を特定可能にする言語的手がかりがあったりと, 意味を曖昧にしておかない工夫がなされている可能性が高いと考えられる。この工夫により, 被修飾名詞が明示されず, 言語的手がかりがない場合に, いかにして意味の特定が担保されるのかという本研究の疑問の解明にはあまり参考にならない用例が得られることが考えられる。このことから, B型の用例が得られなくとも, 研究の遂行には問題がないと考へ, 調査を進めた。

節単位・発話単位・文頭と文末に挟まれた形容詞の語幹・終止形・連体形の分布を, 形容詞の意味属性別に表2に示す。意味属性の分類は, 多くの言語でほかの品詞より形容詞で表されることが多いとされる7分類<次元>・<物体特性>・<色彩>・<人物特性>・<年齢>・<価値>・<速度> (Dixon 1977) に則っている。また, 日本語に特徴的な用法を考へし, <価値>を<価値(i)>と<価値(ii)>に類別した。<価値(i)>は, 「すごい」や意味の向上 (amelioration of meaning) を果たした「やばい」など, 程度の甚だしさを表すものを分類する。<価値(ii)>には, ポジティブかネガティブかいずれかの意味に偏

² B型に4「語幹」用法は存在しないが, 念のため検索し, 運用がないことを確認した。

るものを含めた。さらに、Dixon (1977) の7分類で<物体特性>の下位に分類される「ない」や「多い」などを<存在>として類別した。加えて、日本語文法に用法が特異な感情形容詞も、Dixon (1977) では<人物特性>に含まれるが、本研究では<感情>に区分した。

集計の方針は次の通りである。節単位・発話単位に挟まれた形容詞の語幹・終止形・連体形であっても、不要の意を表す「いい」のような応答のほか、対話者の発話を繰り返すものは除いている。また、副詞や「わ」以外の終助詞を伴うものも、強調の明示や伝達方式の形式化といった機能を多様に果たし、「文に示されている情報についての伝達を目的とはしない、話し手の感動を表出する文」という感動文の定義から一部外れるため、除いている。ぞんざいな「めっちゃ」や終助詞「わ」など、感動文の生産に相性のいい要素も一部あるが、感動文との呼応をまとめる整理が別途必要なものと考え、本調査では扱わない。ほか、形容詞反復発話(大江 2017)は、感動文の一種として数えた。ただし、「めでたしめでたし」のように、形式的には感動文と一致する使用でも、慣習的な意味用法を有するとみなせる場合には、感動文として数えていない。なお、BCCWJ 及び名大の抽出結果に関しては、明らかに感動文として用いられたことを期すために、文末ないし発話単位末に補助記号を含むものを算出した。

表2 意味属性別に見る述べ語数と異なり語数

用法 意味属性	CSJ				BCCWJ				名大			
	語幹		終止・連体		語幹		終止・連体		語幹		終止・連体	
	token	type										
価値(i)	1	1	12	3	0	0	182	2	0	0	159	3
価値(ii)	0	0	6	3	0	0	224	13	0	0	41	9
感情	1	1	12	5	6	4	449	39	4	4	146	21
存在	0	0	5	1	0	0	51	5	0	0	65	4
人物特性	0	0	3	2	0	0	256	46	0	0	95	10
物体特性	0	0	4	3	0	0	407	58	0	0	104	20
次元	0	0	3	3	0	0	41	15	0	0	35	12
色彩	0	0	0	0	0	0	4	3	0	0	2	1
年齢	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	2	2
速度	0	0	0	0	0	0	8	1	0	0	2	1

CSJ・BCCWJ・名大で一定数抽出された終止形・連体形感動文の述べ語数と異なり語数から、語彙密度指数としてC値(= $\text{Log}_e \text{Type} / \text{Log}_e \text{Token}$)を求め、意味属性間で比較したものが図1である。

以下で意味属性別に用例とともに感動文の運用傾向を見ていく。なお、「#」は、節単位末であることを表す。また、形容詞感動文が用いられている箇所には下線を引いておく。

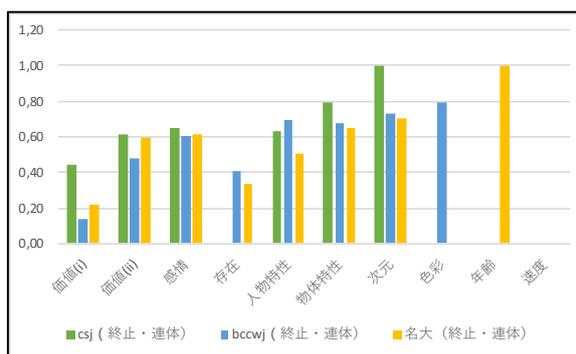


図1 各属性のC値

傾向1：程度の甚だしさが表される場合 (<価値 (i) >)

形容詞が感動文として用いられるとき、(5)及び(6)のように、「すごい」や「やばい」など、<価値 (i) >に当たる、程度の甚だしさを表す表現が多く見られた。この場合、その度合いの振幅が問題となり、ポジティブであったりネガティブであったり、対象のどのような属性を表すかという意味は、解釈の問題とならない。図1に見るように、語彙密度は比較的lowく、述べ語数の割に異なり語数が少ないことがわかる。

- (5) 全然変わってくるんでしょうしね#うーん#ええ#やっぱりそうなんですか#うーん#ええ#凄い#あたし今鳥肌立ちました#

【出典】 CSJ 講演 ID : D01F0030-L (音声タイプ : 対話・模擬)

- (6) ということに影響してるのではないかという風に考えます#やばい#それからえーと原文の姿をどにぐどのぐらい保持しているかという#

【出典】 CSJ 講演 ID : A03F0072 (音声タイプ : 独話・学会)

傾向2 : <感情>が表される場合

(7) から (10) のような<感情>に属する形容詞の使用も、頻度としては多かった。ただし、異なり語数も少なくなく、語彙密度は低くない。これらの語彙も、感動文の性質から話し手の感情を表していることが明らかであり、曖昧性の問題が生じない。

- (7) ああ、恥ずかし#ああ、恥ずかし#恥ずかしいことが果たしてまだ残っているのかどうか、もう私に

【出典】 BCCWJ サンプル ID : LBn9_00134

- (8) ちっちゃいエビとかしか扱ったことがないもんね。#そうやなー、そうか。#しんど#生きてんのはちょっとなー。#大変やなー。#うん#か、勘弁してっていう感じ

【出典】 名大 会話 ID : data100

- (9) なんかベビーカーに乗ってて、すごい汗かいとったんだね。#うん#怖#うん#うん#昨日とか。#もう今連れ回してるから。#それがなんか夢に出て

【出典】 名大 会話 ID : data116

- (10) あの子はさー、見た目重視で今言ったの?#じゃなくて?#おもしろ#見た目重視じゃなくて、全体的に。#全体的に#うん。#すごいおもしろいか

【出典】 名大 会話 ID : data066

傾向3 : <存在>・<価値 (ii)>が表される場合

(11) 及び (12) は、<存在>と<価値 (ii)>を表す形容詞の感動文である。これらは、語彙密度は低めであった。例のほか、「多い」・「乏しい」・「難しい」・「よろしい」など、いずれも意味論的に意味の分類がなされる多義語だが、存在するかしないか、また価値の高さな低さを表すものである。これらは、文脈的変容と捉えられることもあるほど多義が接近しており、**傾向1**と同様に、聞き手は被修飾名詞などの手がかりがなくとも、感動文の意味が特定できる。

- (11) 残念。#気を取り直して、中身を探索すると・・・#むむむむむ・・・#無い、なあ〜んにも、好きなのが入って無いて、言うより、なんじゃこりゃ〜

【出典】 BCCWJ サンプル ID : OY01_02739

- (12) #おー~~~~っ!#良いよ!!#麺を啜る。#おー~~~~っ!#良い!!#魚介系出汁が濃厚です・・・醤油ダレの風味が無くなってますね。

【出典】 BCCWJ サンプル ID : OY03_08809

傾向4 : 典型的な多義的形容詞の場合

(13) 及び (14) は、多義語らしい多義的形容詞「甘い」が別義で用いられている例である。(13) は<糖度が高い>ことを、(14) は<考えが足りていない>ことを意味している。

- (13) いらないではないか!#漬物石をどかし、ちょっとなめてみてビックリ。#甘い!!#伯母が一生懸命探しあてたのはグラニュー糖だったのだ。#大慌てで水洗い

【出典】 BCCWJ サンプル ID : LBp5_00027

- (14) #そういうわけでまたまたコスモスの写真十点。#これで終わったと思うな!#甘い!!#まだまだ続くぞ、コスモス街道!

【出典】 BCCWJ サンプル ID : OY11_03468

傾向3]までで、感動文の使用には、そもそも意味の特定が必要ないような程度の大きさや感情を表すものが多く、語彙の特性が大きく偏っていることがわかった。[傾向4]に見たような典型的な多義語の使用における意味特定について、次節で考察を進めたい。

4. 形容詞感動文に見る意味特定の手がかり

本節では、感動文で立ち現れる、ある多義語の意味が曖昧にならない仕組みを考察する。

(15)の例について、<嫌なにおいがする>という意味が選択され、<怪しい>という意味の選択が限定的になることを前節で言及した。また、「甘い」の多義の運用を(13)と(14)に見た。これらの意味表出の条件が身体性と発話の連鎖に見てとれることを次に述べる。

(15) くさい！* <*嫌なにおいがする / **怪しい> ((4)を再掲)

定延(2002)で、認知者と環境とのインタラクションに生まれる身体性が、文法性にかかわることが論じられている。能動的な認知において、環境と認知者は相互に働きかける関係にあり、環境に認知者が身を置いたり活動したりすると、なんらかの強烈な情報が環境から認知者に返ってくる。この考えにおいて、刺激は、身体性の低いものから高いものまでグラデーションをなしており、認知者が環境に積極的に働きかけなくても、強烈な情報を体感として受け取ることができる。定延(2002)で定義される「身体性」とは、推論や高度な判断を必要とせず、否応なしに感じられやすいことの程度を指す。例えば、(16)と(17)に見るように「痛い」は「赤い」より、「気持ちいい」は「長い」より身体性が高い。これらは、アリサマを表すとき制約となる例である。

(16) a. 私は3回ぐらい痛かったよ。 b. ?私は3回ぐらい赤かったよ。

(17) a. [マッサージ機の[特強]ボタンを指さして、すでに試した者が]

これ押したら、気持ちいいよ～。

b. [新型テレビの[ワイド]ボタンを指さして、すでに試した者が]

??これ押したら、画面が横に長いよ～。 (定延 2002:173-174 下線は筆者による)

この概念を参考に、(15)「くさい」の意味選択に立ち戻ると、<嫌なにおいがする>ことが<怪しい>より身体性が高いことがわかる。<怪しい>は、何らかの事実に基づいて推論した結果の判断であるから、身体性は低いといえよう。このことを発話の連鎖の枠組み(筒井 2012)に組み込んだものが表3である。独話で知識・経験が共有されず情報が話し手に完結する場合と、対話で知識・経験が共有される場合では、推論や高度な判断が難しい。この枠組みに照らして意味の表出を見ると、「くさい」の<怪しい>という意味の選択が限定的になることは、予測可能である。

表3 発話の連鎖に照らした感動文の意味表出 (筒井 2012 を参考に)

発話の連鎖	知識・経験	情報伝達の方向性と発話タイプ	感動文の意味表出
対話	非共有	要求 → 質問	身体性の高い意味
		提供 → 報告	
	共有	要求・提供 → 共有	身体性の低い意味
独話	非共有	方向なし → 独り言	(推論・高度な判断)

このように、被修飾名詞が明示されなくとも、身体性の概念と発話の連鎖との掛け合わせから多義語の任意の意味が特定され、意味の混同は起きない。「甘い」の場合、(18a)では、身体性の高い<糖度が高い>という意味選択が非共有知識の報告としてなされている。対

して、(18b)では、身体性の低い<考えが足りない>という意味選択が、コスモスが満喫される状況が共有された上で示されている。

- (18) a. いないではないか!# 漬物石をどかし、ちょっとなめてみてビックリ。#甘い!#
伯母が一生懸命探しあてたのはグラニュー糖だったのだ。#大慌てで水洗い
b. #そういうわけでまたまたコスモスの写真十点。#これで終わったと思うな!#甘い!
#まだまだ続くぞ、コスモス街道! (13) 及び (14) を再掲)

5. おわりに

聞き手と情景などの非言語情報が共有されない過去の事態や、被修飾語などの言語情報が示されない語幹用法および終止形・連体形用法でも、感動文は文法的に成立する。しかし、実際の語用では、程度の甚だしさを表す用例や感情形容詞の使用が多く、使用傾向に語彙特性の偏りが見られた。また、典型的な多義語が用いられる場合でも、身体性のかかわりから曖昧性が回避されることを論じた。本研究では、話し手が環境からのインタラクションとしての刺激をどのような動機付けで、感動文という表現形式に表すのかという根本的な問題には立ち入れなかったが、意味の立ち現れ方の条件を提起した。また、感動文の定義である「伝達を目的としない」ことがその生成にどう関わるのか、という聞こえと話し手の聞こえへの意識についてまでは、考察を進められなかった。さらに、曖昧性を回避する条件を提案したが、実験などを通じた検証は行っていない。これらを今後の課題に、研究を進めたい。

謝 辞

本稿は、言語資源活用ワークショップ 2018 で発表した内容に加筆修正をしたものです。発表に際し、臼田泰如氏、大江元貴氏、陳祥氏、西川賢哉氏、また多くの方々から重要なご指摘と有益な助言、貴重な情報提供を賜りました。ここに改めましてお礼を申し上げます。なお、いうまでもなく、本論文の不備や誤りはすべて筆者の責任です。

文 献

- Carston, R. (2002) *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.
- Dixon, R.M.W. (1977) Where have all adjectives gone?, *Studies of Language*. 1, 19-80.
- 今野弘章 (2012) 「イ落ち構文：形と意味のインターフェイスの観点から」『言語研究』141, 5-31.
- 国広哲弥 (1982) 『意味論の方法』東京：大修館書店.
- 大江元貴 (2017) 「形容詞反復発話」の文法—「怖い怖い。」は「怖い。」と何が違うか—」『日本語学会 2017 年度秋季大会予稿集』
- 定延利之 (2002) 「「インタラクションの文法」に向けて」—現代日本語の擬似エビデンス—『京都大学言語学研究』21, 147-185.
- 笹井香 (2006) 「現代語の感動文の構造—「なんと」型感動文の構造をめぐって—」『日本語の研究』2(1), 18-34.
- 清水泰行 (2015) 「現代語の形容詞語幹型感動文の構造—「区的体言」の構造と「小節」の構造との対立を中心として—」『言語研究』148, 123-141.
- 筒井佐代 (2012) 『雑談の構造分析』東京：くろしお出版.
- 八亀裕美 (2003) 「形容詞の評価的な意味と形容詞分類」『阪大日本語研究』15, 13-40.

関 連 U R L

コーパス検索アプリケーション『中納言』 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>